



反抗期の唇

(後編)

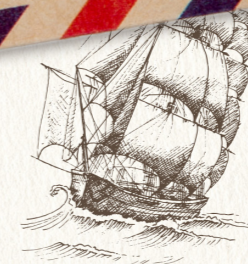
指定されたレストランへ到着すると、今回のフラッシュモブを行うダンサーやカメラマンたちが念入りにリハーサルをしていた。私も一通りの流れや演出を確認しそれに加わった。奥様の容体も良く、今回のサプライズを兼ねた旅行も無事に出発することができたと聞いて嬉しくなると同時に、「きっとこの旅行がこの家族でする最後の機会になる」と聞いて、やっぱり胸がキュッとなった。たとえそうだとっても、残された時間を笑って過ごしたい——そう言った旦那様の気持ちが何よりも最優先で、今日ここにいる誰もがその為に動いている。ただ心を込めて、最高の一瞬にする。そんな空気が流れていた。

いざ本番数分前。入り口のスタッフがインカムで合図を受け、依頼主家族が到着したとの知らせが入った。私は伴奏に合わせ、レストランの箱バンドに扮して歌い始めた。自然に、いつものように、歌詞に集中…。そしてご家族が入店し、予約席へと案内されていった。

演奏の合間に一瞬見た依頼主は正直想像と違って、なんというか、サプライズやフラッシュモブを家族のために企画するようには見えないというか…最後に踊り出すその人は、どちらかというと静かで、厳格な雰囲気、誠実さが佇まいから伝わってくるような方だった。そして、小柄な奥様と妹さんの後ろを不機嫌そうに歩く高校生の娘さんが目に入った。ここへ来たのは不本意で、できるな

Moon River

10



らば早く帰りたいとでも言ったような、そんな表情が見てとれた。せっかくの旅行なのに、少しの苛立ちと退屈さを全身で表現している。私は歌いながらも、いつしかの自分自身と重ね、目の前に現れた一つの家族の形に心から共感してしまった。

そして演出も終盤に差し掛かり、いよいよ会場一体となってフラッシュモブが始まった。ドリンクを運んできたスタッフや、依頼主家族の隣のテーブルで食事をしていたカップルまでもが、私の歌う楽曲に合わせて次々に踊り出す。当のご家族は、誰かの誕生日か何かのお祝いかな、と言ったような表情で不思議そうに周囲を見渡している。その時、仕掛け人の旦那様が勢いよく席を立ち、この日の為に練習してきたであろう振り付けを勢いよく踊り始めた。まん丸に見開かれた奥様の表情と、少し迷惑そうにしかめっ面をしながらも、驚きが隠せない娘さんの表情。私から見える旦那様の後ろ姿は、少しぎこちなくて、ただただ必死で。同じように集中していると、あっという間にフィナーレになった。

スタッフが旦那様に花束を渡しマイクが向けられた。全員が旦那様から奥様へ贈られる言葉を息を飲むように見守った。やっと紡ぎ出された言葉はとても小さく、とても短いものだった。その沈黙の間に、ありふれた言葉の中に、愛だったり想いだったり、近すぎていつしかわざわざ言葉にする必要なんてない誰もが無言の中に置き忘れた大切な言葉を見た。そんな両親を前に、目を大きく見開いたままの娘さんの表情。唇を噛んでいることがバレないように、下唇の内側だけをギュッと噛み締めて、小さな手は少し震えていた。よくあるサプライズの現場のように、家族が驚きのあまり歓声を上げることも、号泣することもなかった。けれど静けさの中で唇を噛み締めるような確かなものがそこにあった。

このご家族にとって、この時間がどのようなものになるのかは本人にしか分からないけれど、この日の言葉の意味を、娘さんはきっと何度も思い返すのではないだろうか。小さな背中であんな感情を背負ってもがいているであろう今、言葉にできず飲み込んだ言葉たちは、いつの日か素敵な大人になった娘さんのその唇から紡がれる、優しい言葉となって。

今、目の前にある世界が、自分の手の届く範囲にあるのなんて一体どれほど一瞬の出来事なんだろう。ちょっとした失敗や恥ずかしさなんてものには絶対に邪魔できない、大きくて確かな想いが小さな宇宙に表現される瞬間。優しい祈りの中で、この一瞬さえもが通り過ぎていった。

azufeling